

<研究ノート>

免震構造のある金毘羅燈籠と村落に関する研究ノート

— 鳥取県中部地震による被災地の事例から —

A Research Note on the Relationship KOMPIRA Stone Lantern

Maked Quake- Absorbing Structure and Rural Community

— A Case Study at the Suffered Area by Earthquake in Central Tottori Pref. —

白石 太良^{*}、米原 俊一[†]

Taro Shiraishi, Shun-ichi Yonehara

2016年秋の鳥取県中部地震で被災した金毘羅燈籠のなかに、免震構造が施されているため倒壊を免れたものがみられた。この工夫は、水除けをはじめとした村の安寧を願う金毘羅燈籠への祈りの1つとして地震災害も含まれる証しと目されたが、住民はそれを特に意識することはなかった。この特徴ある燈籠を村が誇る歴史遺産ととらえ住民連帯のシンボルとするには、社会教育ともいべき学習機会を整えることが求められる。

キーワード：金毘羅燈籠、免震構造、歴史遺産、村落社会、住民意識

I. はじめに

2016（平成28）年10月21日に発生したマグニチュード6.6の鳥取県中部地震による被災は、震源地に近い倉吉市東部とその周辺の東西5km、南北15kmと比較的狭い範囲に集中し、家屋の倒壊や屋根瓦の崩壊だけでなく村々の小祠や石塔などにも被害をもたらした¹⁾。この地域に数多く建立されている金毘羅燈籠も、筆者の把握し得た範囲ではあるが19基が倒壊している。

これら倒壊した金毘羅燈籠のその後は、それが誰のものか（特にその建立される土地が誰の所有か）という現代的な所有権が関係して扱いに相違が生じたけれども²⁾、地域住民らの尽力もあって修復・再建された燈籠も少なくなかった。このような金毘羅燈籠の再建に人びとはなぜ取り組んだのかはその事例とともに既に報告したが³⁾、その中で注目されたのは金毘羅燈籠をどの様に受け止めていたかということであった。なぜなら、普段の暮らしでは村の風景に溶け込んでしまっている金毘羅燈籠の歴史的意味やそれへの人びとの思いを、目に見える形で教えてくれたのが地

^{*}流通科学大学名誉教授、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

[†]郷土史家

震による倒壊という現実だったからである。しかも、被災とその修復という過程は、現代の村落のあり様を考えさせる機会ともなった。

しかしこれを逆にいえば、災害に遭遇して倒壊しなければ、金毘羅燈籠への思いや村落との関わりを特に意識せずに過ぎてゆく可能性があったということになる。

このことに関連して鳥取県中部地震では、被災地域にありながら免震構造が施されていたために倒壊しなかった金毘羅燈籠が注目されている。それは、倒壊から修復へとといったような村落社会における金毘羅燈籠の大切さを再確認する機会を逸したといえるけれども、その一方で「災害に強い自慢の燈籠」という形で金毘羅燈籠の価値を住民に思い起こさせることになったのではないかと思われるからである。

そこで、免震構造のある金毘羅燈籠とはどのような燈籠であったのかを中心に、研究ノートとしてまとめておくことにしたい。この場合に注目したのは、地震の被災から耐えたこの燈籠は防災への祈りのシンボルであり、わが村（村の語は村落の意で用いており、行政村ではない。以下同じ）には誇ることの出来る文化財があるという喜びをもたらせたのではないか、またそれが住民の新たな連帯へとつながっていったのかどうか、ということであった。

II. 鳥取県中部地域の金毘羅燈籠

免震構造のある金毘羅燈籠と村落の関係について考えるために、まずは鳥取県中部地域における金毘羅燈籠が村のなかでどのような意味をもって建立されたのかにふれておきたい。

倉吉市を中心とする鳥取県中部地域には数多くの金毘羅燈籠が建立され⁴⁾、郷土史家米原喜雄氏の長期に及ぶ調査記録をもとに改めて筆者が確認したところ、2015年（平成27）現在で237基にも及んでいた⁵⁾。このような基数の多さの背後に海港や河港などで金毘羅信仰にもとづく水難除けへの祈願があったことを否定するものではないが⁶⁾、金毘羅燈籠がこの地を流れる天神川流域の平野部の各農業村落にも1基ずつ建立される場合が多いことを考えれば、水運との関わりやそれから広がっていった参詣道などの街道交通だけで説明するのは難しい。これについて米原喜雄氏は、金毘羅神が水神であることからそれぞれの村落が洪水に見舞われないようにとの水伏せを祈る信仰の対象として村ごとに祀ったのではないかといい⁷⁾、聞き取り調査の結果をまとめた同氏と筆者の共著においても⁸⁾、水害を防いで五穀豊穡をもたらせることはもとより、村びとの暮らしが安全で安心であるようにと祈る燈籠、すなわち土地神を可視的に具現化させた石塔という側面が大きいと報告した。

このようにそれぞれの村落の安寧と繁栄を願う金毘羅燈籠は、建立場所の近くに小祠や堂が集積する場合が少なくなく、また燈籠前の広場で催事が行われるなど村びとの集うところになる場合も多かった⁹⁾。そのため、燈籠は聖と俗の両面から住民としての共属意識を育むなど共同体的な暮らしを象徴するものとしてとらえられ、したがって「村びとみんなのもの」すなわち一種の社会的共有財と考えられたようである¹⁰⁾。

しかし、時代の推移のなかで生産活動をはじめとした村の共同体的機能が弱まるとともに金毘羅燈籠への五穀豊穡の祈願といった信仰的役割は薄れ、また、暮らしの個人化や地域外からの移住者の増加も関係して、人びとの燈籠への思いも変化していく。そのため、金毘羅燈籠は村の歴史を伝える文化財と理解しつつも、日常の暮らしでは特にその存在を気にすることがなくなっていったのである。この状況のもとで再び金毘羅燈籠は社会的共有財、すなわち「みんなのもの」という意識を呼び覚まされたのは燈籠の倒壊などの異常が生じたときであったようで、その間の状況についてはすでに報告した通りである¹¹⁾。

このような鳥取県中部地域の金毘羅燈籠にみられる特徴をふまえ、免震構造のある金毘羅燈籠について考えてみたい。

Ⅲ. 川六作の燈籠の免震構造

鳥取県中部地震の被災地にありながら倒壊せずに残った燈籠（金毘羅燈籠以外のものを含む）として注目を呼んだのは、幕末期に因幡国西部から伯耆国東部にかけて活躍した通称川六¹²⁾と呼ばれる名石工が製作した燈籠である。川六作の燈籠はそのいずれもが今回の地震で倒壊しなかったというが¹³⁾、なかでも鳥取市青谷町長和瀬¹⁴⁾の旧伯耆往来の道脇に建立されている高さ約 2.9 mの常夜灯（写真1参照。この燈籠には「金」の文字が刻字され金毘羅燈籠とわかる）は、その石組みの巧みさが関わって災害に強い燈籠として評判になった。

この燈籠が倒壊をまぬかれたのは、台座が横に広がって地面に食い込み大きい笠と太い柱の重量をしっかりと支えていることに加え、火袋を載せる台の下端が緩やかに凹んでそこに柱の頭部が納まるようにするなど、柄（ホゾ、部材を接合させるための突起物）と柄穴の組み合わせ方が素晴らしかったことによるとされる。しかも、部材に自然石を用いて何の加工もしないのであるから、石工川六の石材を見つめるまなざしとその技術が倒壊を防いだともいえる。

川六作のさまざまな石造物にみられた地震対策の全貌は未だ明らかではないが、燈籠以外にも新たに川六作と確認された鳥居に免震構造が見つかったとの報道もある¹⁵⁾。



写真 1. 鳥取市青谷町長和瀬の金毘羅燈籠
(筆者写す)

長和瀬の金毘羅燈籠の免震構造については日本海新聞に評論が掲載されているので、やや長文になるが資料として原文のまま挙げておきたい。

(資料1) 日本海新聞(2017年3月2日版)『潮流』 (公立鳥取環境大学中橋文夫教授執筆)

(前略)なんと台座、胴部、火袋、傘石と、一部を除きほぼ自然石である。灯籠は切石で造られた石造物が一般的なイメージだが、ここでは違った。一見、庭石を縦に積み上げたように見えた。

しっかり見てみよう。台座は横に広がり、地面に食い込み、まるで大地に根を張っているようだ。その上に船石が乗る。池泉式庭園、枯れ山水の流れに船石はしばし配される。(中略)その上に胴部が乗る。まるで庭石の立石のようだ。丸みを帯び角がない。

ここから防災の技を見る。火袋を乗せる横に広がった台座が胴部の立石に台座に乗る。台座の下端が緩やかにへこみ、そこに胴部の頭がすっぽりと納まる。まるで帽子を被るように。そこも加工されていない。その納まりが実に美しい。緩やかな石の面が柔曲線を描きながらなじんでいる。とても接合部には見えない。がっちり食い込み、揺れに耐えてきたのだろう。その上に火袋が乗る。(中略)そして笠石が乗る。これも横に広がり立派だ。これが燈籠の全景で実に美しい。正に日本庭園の景と強が同居する美の作品と言える。鳥取はもっと川六の石造芸術を自慢しても良いはずだ。

前述のように、川六作の燈籠(鳥取県内で川六作とされる燈籠は11基)はいずれも地震による倒壊を免れた。もちろん、そのなかには鳥取県中部地震の被災地とほぼ重なって本稿で鳥取県中部地域とする範囲以外に建立されるもの(5基、いずれも青谷町を除く鳥取市域に位置する)も含まれるから、倒壊しなかった理由の全てが燈籠への工夫によるというわけではない。

しかし、川六作品には、上の長和瀬の事例で挙げたような台座から宝珠に至る自然石の組み合わせの妙といった工夫がなされた4基はもとよりのこと、切石の加工による燈籠7基の場合でも、石材に相欠き継ぎを施すほか台座を置く基壇に凹凸のある自然石を配するなど免震性を高める細工が施され¹⁶⁾、それが燈籠を倒壊させなかった大きな要因と考えられている。その1例をあげれば、鳥取市青谷町井手(本稿ではこの地域は鳥取県中部地域に含まれる)の稻荷社横にある燈籠(写真2参照。刻字から金毘羅燈籠とわかる)は切石で作られているが、4つ足になった台座の乗る基壇



写真2. 鳥取市青谷町井手の金毘羅燈籠
(筆者写す)

が自然石であり、その凸部が柄の役割を果たして地面の揺れを防ぐ構造となっている。

もとより燈籠の免震構造については、川六作以外のものを含めた全ての燈籠の構造を知り得ていないなかで、短絡的な結論を避けなければならないことは言うまでもない。とはいえ、少なくとも川六作品と確認される燈籠のいくつかからは、その形的美しさとともに、今から200年も前の近世末に江戸や京・大坂から遠く離れた山陰地方で耐震性を高めた石造物を造った匠の技がみてとれる。そこには、時代も規模の大きさも、さらには人びととの関わり方にも違いがあって比べるべくはないと知りつつも、はるか昔の飛鳥時代に地震に耐える木造建築物法隆寺五重塔¹⁷⁾を建てた大工の技術にも似た素晴らしさがうかがえるのである。

(資料2) 川六作の燈籠の一覧		『川六一因州が誇る幕末の名石工』 ¹⁸⁾ をもとに筆者作成			
所在地	制作年	石材の別	免振構造の有無	備考	
1 鳥取市三津	1859(年)	切石	不明		
2 鳥取市小沢見	1862	切石	不明		
3 鳥取市気高町酒津	1841	自然石	あり		
4 鳥取市気高町奥沢見	1846	切石	不明	5と一対に	
5 鳥取市気高町奥沢見	1847	切石	不明		
6 鳥取市青谷町鳴滝	1831	切石	不明		
7 鳥取市青谷町長和瀬	1848	自然石	あり	金毘羅燈籠 ¹⁹⁾	
8 鳥取市青谷町青谷	1850	切石	不明	金毘羅燈籠	
9 鳥取市青谷町井手	1857	切石	あり	台座下が自然石 金毘羅燈籠	
10 鳥取市青谷町長和瀬	1863	自然石	あり		
11 鳥取市青谷町長和瀬	1863	自然石	あり	10とは建立地が別	

IV. 免震構造のある燈籠と村落

川六作品にみるように免震性にまで配慮した燈籠は、ことに自然石を用いた燈籠では、石材の組み合わせの技とその美しさの魅力とが相まって、村びとが誇りに思える歴史遺産ということが出来る。しかも、それが金毘羅燈籠となれば、前述したような村の安全・安心への祈願が地震災害にまで及ぶのであるから、村の暮らしのなかでは「自慢の燈籠」として大切に守られていたのではないかと考えてもおかしくはない。しかし、管見の限りではその様な報告に接したことはなく、聞き取りをしても免震構造の故に優れた燈籠という評価を耳にすることはなかった²⁰⁾。例えば免震構造の代表例として挙げた青谷町長和瀬の燈籠においては、近くの住民が暮らしの安寧を願って日々の清掃をしたけれども、地震被害から守る祈りという回答は得られなかったのである。

その理由としては、先にも述べたように現代は金毘羅燈籠への祈りと暮らしとの関係が薄れてきていることから、燈籠に施された免震の工夫についても忘れ去られたためではないかとも考え

られる。しかし、もともと鳥取中部地域の金毘羅燈籠への祈りは水難とともにくり返し起こる水害といった発生頻度の高い災害が無いようにとの祈りと、そこから広がっていった日々の暮らしの安寧への祈りであったので、それに比べれば頻度の低い地震災害は水との関係が見えにくいこともあってもともと特に意識されることがなかったようである。

すなわち、金毘羅燈籠にみられる免震の工夫は地震で村が被災しないようにという祈りの表れではなく、燈籠が倒壊しないようにという石工の思いであったり²¹⁾、石材に自然石を選んでその組み合わせの美しさを求めた結果によるものと考えてもよいのではないか。とすれば、村びとたちは、金毘羅燈籠に向かって首を垂れるときだけでなく、通りがかりにでも燈籠に免震性があることに気付くことはそれほど多くないであろう。事例に挙げた長和瀬の金毘羅燈籠においても、「燈籠にそんな工夫があるとは知らなかった」という住民からの聞き取りが得られており、この構造そのものが広く知られていなかったのである。

このような地震に強いという川六作品の燈籠が持っている特徴を気付かせてくれる機会が、この度の鳥取県中部地震による被災であったろう。しかし、既に述べた通り川六作の金毘羅燈籠はいずれも被害を受けることがなく、その他多くの破損しなかった燈籠と同様に形状には変化がないことから、その理由が免震構造にあるとまでは村の多くの人びとの考えが及ばなかった。すなわち、破損後の修復などのような「燈籠はみんなのもの」との思いを新たにする活動²²⁾がなかったのはもちろんであるが、周囲の石碑等が被害を受けたにもかかわらず何の被害もなかった要因をその構造から探るといった、「燈籠の魅力発見」の活動をこの機に村びとたちが自主的に行うというようなことも見られなかったのである。

したがって、村のなかにある金毘羅燈籠には免震構造がなされているから「自慢の燈籠」との気持ちを村びとが抱き、それを「みんなのもの」ととらえて住民連帯のシンボルにするには、学習機会を設けるとか情報を発信するなどの何らかのしかけ、大仰に言えば社会教育が必要であった。これについては先に資料1として挙げた評論などの新聞報道のほか²³⁾、石工川六の作品の形状の美しさや石材の組み合わせの技を知る民間団体²⁴⁾による活動などが進められている。

とはいえ、人びとの歴史遺産の価値をみるまなざしに公的な指定を受けているかどうか（いわゆる指定文化財の意）がありがちななかで、無指定の金毘羅燈籠を「地震に強い自慢の燈籠」と村びとがこぞとらえるまでには至っていない。すなわち、免震構造という優れた機能を持つ金毘羅燈籠は、鳥取県中部地震との遭遇によってその価値と重要性を知ることにはなったけれども、現状ではそれを村びとが後世に伝える、あるいは絆づくりに役立たせようという動きは未だみられていないのである。

しかし、村の安寧を祈る信仰のシンボルという金毘羅燈籠の意味のなかに地震災害からの守りが加えられるとともに、それを象徴的に表す免震構造が施された燈籠が村のなかにあるということは、将来には必ずや村びとの大きな誇りになるものと思われる。とすれば、免震構造のある金

毘羅燈籠は村落社会における大切な歴史遺産であり、村びとにとっては社会的共有財の1つであるということの理解に向けての活動が、公的にもまた民間においても継続的かつ積極的に進められる必要があろう。

V. あとがき —まとめとともに—

鳥取県中部地震により被災した金毘羅燈籠では破損した燈籠の多くが修復され、その過程を通して忘れがちになっていた村落社会における金毘羅燈籠の意味や社会的な共有財という理解を再確認するとともに、住民の連帯を一層深めることになった。これに対して免震構造のある金毘羅燈籠の場合は、地震との遭遇が免震にまで配慮して建立されているという造形上の素晴らしさを知るきっかけとなった。

とはいえ、この地域の金毘羅燈籠への願いのなかに震災からまぬがれるという祈りがいないことのほか、燈籠の姿かたちに変化が見られなかったこともあって、村びとの多くはそれを特に意識することもなかった。すなわち、免震構造という特色ある燈籠が村のなかに存在するということが、その後の村落社会のあり様に大きな影響を与えなかったのである。

したがって、免震構造のある燈籠がわが村に建立されているという事実を知り、それが自然石などを用いた造形の美しさともあいまって村の自慢の文化財であり、共有財であると人びとが思えるようになるには、一種の社会教育とでもいうべきさまざまな活動が求められる。これについてはいくつかの努力がなされつつあるとはいえ、その成果は未だ村びとの意識や暮らしの変化までには十分に及んでいないようである。

本稿は、鳥取県中部地震に遭遇した金毘羅燈籠のなかにみられた免震構造のある燈籠の発見とその文化財としての意味、それへの村落としての関わり方などについて研究ノートとしてまとめたものである。筆者は本稿を鳥取県中部地震による燈籠の倒壊とその修復に関わる論考²⁵⁾の補遺と位置づけているが、私見に類する部分も多く含まれており、かつ調査が主に聞き取りによっていることも関係して試論の域を出てはいない。とはいえ、免震構造を施された金毘羅燈籠の実際およびそれと村落社会との関わり、さらにその歴史遺産としての価値などについて、不十分ではあるが事例とともに示し得たのではないかと考える。

もとより本稿は、鳥取中部地域という限られた範囲の、しかも川六作品の金毘羅燈籠にみる免震構造に焦点を当てた小論にすぎない。地震への備えにも配慮した構造の燈籠は広く各地に存在するであろうから、それらとも合わせながら免震構造のある燈籠の意味や村落社会との関わり、あるいは村の文化財とか共有財というとらえ方について考えていくことが求められている。筆者にとっては、今後に残された課題のほうがはるかに多く、また大きいのである。

謝辞

本稿をまとめるに際しては、川六ファンクラブ会長青木清輝氏、同クラブ石田敏紀氏、鳥取市あおや郷土館館長河根裕二氏、読売新聞記者中田敦之氏ほか多数の方々からご助言とともに資料のご提供を頂いた。全ての方のお名前を記すことはできないが、心より厚く御礼申し上げます。

注、参考文献

- 1) 建物の倒壊は全壊 16 棟、半壊 251 棟とそれほど多くなかったけれども、屋根瓦や壁の崩壊、墓石の倒壊などが目立った。
- 2) 私所有地に建立された燈籠や私有の燈籠のなかには、火袋から上部が脱落して所在不明になっているもの（湯梨浜町東郷地区松崎の旭区）、所有者によって再建されたもの（北栄町北条地区西新田場）、地域住民が笠・火袋・柱を公民館横に移動させたもの（北栄町北条地区江北）などもある。
- 3) 白石太良「被災した村の歴史遺産と村落社会—鳥取県中部地震による金毘羅燈籠の破損を例に—」、『流通科学大学論集—人間・社会・自然編』、第 31 巻 2 号（2019）pp.1～21
- 4) ここでいう鳥取県中部地域とは、倉吉市、東伯郡各町、鳥取市旧青谷町の範囲を指している。
- 5) 白石太良・米原喜雄「鳥取県中部の金毘羅燈籠と村落」、『御影史学論集』、第 41 号（2016）pp.21～61
- 6) 北川央『近世金毘羅信仰の展開』（岩田書店、2018 年）では、鳥取県西部の米子近辺で近世に金毘羅信仰が広まった背景として、日本海沿いの西廻航路の開航とその前提となった鳥取藩の大坂廻米をあげている。県中部においても、倉吉付近を流れる天神川河口の橋津に藩倉が置かれたことが関係するかもしれない。
- 7) 米原喜雄「鳥取県中部の金毘羅燈籠」、『鳥取県民俗懇談会会報』第 7 号（2007）pp.42～45
- 8) 白石太良・米原喜雄「農村地域における金毘羅燈籠への祈り—鳥取県中部の聞き取り調査から—」、『近畿民俗』第 182 号（2017）pp.1～18
- 9) 前掲 8) 鳥取県中部地域では、社寺の境内・参道に建立されたものを除く 182 基のうち 80 基が地蔵や堂（薬師堂、観音堂など）のようなものに隣接して金毘羅燈籠が建立されている。また燈籠の前の広場については夕方の牛の追い出し場、相撲や盆踊り、とんどの場所、子供や年寄りの遊び場などの聞き取りがあり、村びとが共同で利用する場所であった。
- 10) 共有財とは、入会地や共有林などのように経済資源の共同利用地を指す語である。金毘羅燈籠は経済資源ではないが、「住民たちみんなのもの」という意味から社会的な共有財とってよいのではないか。
- 11) 前掲 3)
- 12) 本名尾崎六郎兵衛、因幡国気多郡川積（現鳥取市青谷町北河原）生まれ、生年不詳、1865 年（慶応元）没。作品には狛犬が多いが、燈籠、地蔵、鳥居、手水鉢など多岐に及ぶ。鳥取市あおや郷土館編・発行『没後 150 年記念 川六一因州が誇る幕末の名石工—』、2016 年による。
- 13) 庭園文化研究家・川六ファンクラブ代表青木清輝氏談。この団体は川六作石造物の魅力の発掘と発信を目的として 2006 年に発足し、なかでも狛犬を世界遺産にしたいとの願いのもとで活動している。
- 14) 青谷町は鳥取県東部の旧因幡国に属するが、数多くの金毘羅燈籠の建立がみられる伯耆国に隣接することから本稿では鳥取県中部地域に含めている。
- 15) 新たに川六作と判明した青谷町鳴滝の鳥居は、柱の下部が八角形で大きな礎石にきちんとはまり、上部の石組みも横揺れに強いよう工夫されるなど地震対策が取られていると報道された。（日本海新聞 2018 年 1 月 13 日版）

-
- 16) 前掲 13) の青木清輝氏談。「相欠き継ぎ」は建築用語で、角材を互いに半分ずつ欠きとって切り取った部分をつなぐ方法である。これを石材に用いて免震性を高めたことになる。
 - 17) 法隆寺の五重塔では、現代建築のような中央の耐力垂直柱がないこととか、大きな柱のようにみえながら吊り下げられているだけという心柱などによって地震の揺れを軽減している。
 - 18) 編・発行は前掲 12) に記載。
 - 19) 備考欄で金毘羅燈籠とするのは、前掲 5) の鳥取県中部の金毘羅燈籠一覧表に記載のものである。
 - 20) 前掲 5)
 - 21) 前掲 13) の青木清輝氏談、同氏によれば、過去の地震の反省から京都の燈籠では免震構造が一般的であるという。
 - 22) 前掲 3)
 - 23) 資料 1 のほかに、読売新聞 2018 年 3 月 14 日発行の鳥取県版でも石造物の免震構造に関わる石工の知恵が紹介された。
 - 24) 主たる民間団体は前掲 13) に挙げた川六ファンクラブである。
 - 25) 前掲 3)